

エリザベス朝の宗教政策と英語標準化：順応という選択

Religious Policy and the Standardization of English

石山久美

Millward (2012) は、エリザベス1世の長期にわたる人気のある統治（1558年～1603年）は強力な国家主義的な君主としてであり、英語に対する誇りを育んだと初期近代英語の形成と発展を説明する（221）。Knowles (1999) も、*A Cultural History of the English Language*（小野茂・小野恭子（訳）『文化史的に見た英語史』）のなかで、ヨーロッパの多くでは戦争となったカトリシズムとプロテスタンティズムだが、エリザベス朝イングランドにおいて人々は大きな反乱のない比較的安定と秩序の社会を作り、そこで英語は国語となり、女王が使用する英語を「最も重要で、模範としていく」言語となったと述べる（94-95）。

初期近代英語期と重なるエリザベス朝に生きた人々は、対外的な緊張関係と経済が大きく変化していく中で、実際には不安定による恐れと戦って生きていたが、その葛藤の中でも家族と信仰の友とのネットワークにより、安定と秩序ある地域社会を形成していった。イングランドが「ローマ教皇抜き」（八代 1986:388）という形で、国家宗教としてキリストを信仰する宣言を行ない正式に大陸から独立した後、人々は最も身近で生活の運営管理者でもあった教区教会の変化を通して、大きな宗教生活のシフトを迫られる。具体的には、カトリック大聖堂が誇る華麗なステンドグラスや香のかおりが漂う、神秘的で薄暗くミステリアスな礼拝堂でラテン語聖歌を聞くのではなく、日差しが明るく入ってくるガラス窓と聖餐のテーブルとに代表される建物の中で、母語である英語で聖書の御言葉を聞き、また自分でもそれを読むという礼拝スタイルの始まりである（Usher 2014）。

本稿では、宗教生活の変化から、いかに英語の綴りと発音の標準化という動きが、始まりは教区教会を通して上からの宗教政策と合わせて進み、やがて労働力として地域社会を離れて都市部に出て来た人々が生活上の必要としてそれを下から推し進め、中央に自分自身を組み込んで行くという積極的な順応という選択によって全体に広がっていくことになったという解釈の可能性について考察する。

1485年、イングランドではヘンリー7世の即位によってチューダー王朝が始まる。ブリトン島内での豪族同士の争いが終結し、イングランドは封建社会から主権国家へ、王を中心とする中央集権政府による統治体制を確立していく（図1）。そして、チューダー王朝最後の王で、ヘンリー7世から見て3代先のエリザベス女王の治世において、イングランドがヨーロッパ大陸から明確に独立していく際、鍵となるのが国家の宗教政策である。

1533年にヘンリー8世に世継ぎの子供が必要であるが妻は年老いており、離婚が許されないローマ・カトリック教会から離れることを宣言しイングランド教会が生まれ、エリザベス王女がそれを象徴するような存在として生まれる。プロテスタントの立場である「英国国教会」の正式な誕生は、

1558年とされ（八代 1986:398）、1563年にエリザベス朝の時にその教義がまとめられ、カルバン主義に近いプロテスタントの神学に立つ宣言をしたとき、正式にカトリック教会から独立し、自分たちの国家宗教としてキリスト信仰の国家を確立する。エリザベス女王と教会との関係については、評価する者の信仰心によって変わるが、Haigh（2013）はエリザベス女王には支配的（“bossy”）な面があったとしつつも、その理由について女性君主を認めない男性を抑えるための態度だったとし、更にエリザベス女王が王としての仕事を「神から与えられた運命として自覚していた（“She had a sense of her own God-given destiny”）」と説明する（Haigh 2013:31）。エリザベス朝は、イングランドを英国として国家を建て上げるために、英国国教会を整える宗教政策を推進した。その信条は、今日でも英国国教会の教義として残っている¹（Williams 2013:458）。

エリザベス女王が導入したプロテスタントは、ルター派などの大陸のプロテスタントとはかなり異なっていた（Latreille & Siegfried, 波木居（訳）1958:238）。カルバン派の穏健な考え方がより大きな影響力を持っており、実践的で実用的な神学の伝統が形成されつつ、形はローマ・カトリックのヒエラルキーを少なくとも最初は維持し運営するなど、英国のモデルは独特な形態と内容であった。教会の基本的な形は、司教が28の教区を統括し、各教区は聖職者が管理する小教区に分割されるという、イングランドの人々にとって、教会のシステムとしてはすでに存在していた伝統的な構造を継承していた（Usher 2014:209）。教区は地元のコミュニティによって資金が提供され、そのコミュニティは教会や社会の運営にも積極的に関与し、教会管理人の役割も果たした。政府は教会教区を通して、社会の秩序と安定を図るために導入する様々な法規制や、政策の実施と、教区の人々への教育、道徳的規制など責任範囲を広く担っていた。カトリックの職位としては聖職者としての正式な資格は持たないものでも、エリザベス朝においては政府に忠実なプロテスタント信者の人材であれば平信徒であっても積極的に採用し、重要な地位に就かせるなど、それまで固定していた教会の職位制度とは明らかに異なる教会であった。

英国国教会において、国家として積極的に進めた政策の一つが英訳聖書の導入であり、これがイングランドにおける英語の文体に多大な影響を与え、標準化を広げ押し進めていく動きにつながる。「標準英語の発達と普及に貢献したものは、宗教改革の運動によって起こったBibleの翻訳である」（廣岡 1956:188）と理解されている上からの動きの始まりである。聖書の英訳は実際にはA.D. 700年代から存在するが、中世以降に本格化し、ヘンリー8世の時代に全巻の英訳が国家プロジェクトとして進められ、具体的に英訳聖書を礼拝で使用を義務付けたのがエリザベス朝のプロテスタント教区教会である。『英語史総合年表』（寺澤・川崎 1993）から聖書英訳の過程における主要事項を抜粋する。

c1384	Wycliffite Bible (Early Version)
c1388-95	Wycliffite Bible (Later Version)
1525-26	Tyndale's New Testament
1535	Coverdale's Bible
1537	Matthew Bible

1539	The Great Bible
1560	The Geneva Bible
1568	The Bishops' Bible
1611	Authorised Version

カトリック・ローマ皇帝の圧力にあつて、ウィクリフ (Wycliffite)、ティンダル (Tyndale) まではまだ、イングランドにおいて聖書の英訳は命がけであつた。神の言葉である聖書の御言葉を、俗民衆の英語に訳すのは侮辱であると考えられていたため、ティンダルは海外で聖書ギリシア語原典からの英訳に取り組み、『英訳聖書ティンダル訳』(新約聖書)をドイツで完成させる。これは優れた英訳として後に積極的に採用されることになるが、当時イングランドですぐに広がることはなかった(西村 2021)。しかし、1535年に、ドイツから広がった『カヴァーデイル聖書』がヘンリー8世(在位：1491-1547)によって認められ、エドワード6世(在位：1547-1553)も聖書英訳を国家プロジェクトとして保護し、『大聖書(The Great Bible)』を採用する。エリザベス女王の異母姉であるメアリー女王の治世(在位：1553-1558)にはカトリックの礼拝に戻され一時的にこの動きは止まるが、大陸では、プロテスタントの考え方が色濃く反映されている『ジュネーブ聖書』がジュネーブで出版される。エリザベス女王(在位：1558-1603)治世のイングランドにおいてはこれは好んで受け入れられず、1568年に出版された『主教訳聖書(The Bishop's Bible)』を広く使用するようになる。英国国教会の最高総督であり、プロテスタントの宗教を司るエリザベス1世の姿が表紙に描かれている²。両脇に描かれている人物に「信仰」と「慈善」を表す文字があり、女王には「希望」と記されている(Textus Receptus Bibles)。その後、1611年にスコットランドとの統一を果たしたイングランド王King Jamesに献上された『欽定訳聖書(The Authorized Version / King James Bible)』の完成まで、英訳聖書は国家プロジェクトとして続いていく。欽定訳聖書は、標準文語英語のお手本として広く受け入れられ(Millward 2012)、「その華麗な文体と英語の豊かな表現ゆえに、英語の純粋性を象徴する散文の傑作」(児馬 2013:93)と言われている。

1558年、エリザベス朝の宗教政策は英語聖書の導入と共に、プロテスタントを国教とすることだった。英国国教会における礼拝生活は具体的にどのように変化したのか。宗教改革以前の教会生活の特徴を、イングランドの中世後期の教会を訪れることにより体験できるが、簡単にいうと視覚的で感覚的に演出されていることである。イングランドの中世後期の教会の姿を復元したとされているエセックス州にある聖マリア聖母教会³の内部にはステンドグラスや聖人の像などが豊かにあり、華やかである。建物も壮大で、人々は、キリストによる救いのストーリーについて、文字ではなく、そのような装飾から、教区民の想像力を掻き立てるよう工夫されている。エリザベス朝の人々の多くが、農家の比較的質素な家で暮らしていた(Williams 2013:13)のに対し、教会は全く対照的に畏敬の念を抱かせる場所として立派で豪華に作られたようである。そして、壁に描かれている多くのイメージは、教会区民に正しい生活を送らないことの結末を警告するもの(地獄に落ちるイメージなど)もあり、教えを目的としていたようである。教会で使用する言語は厳粛で荘厳なラテン語

で、それは教会の神秘性、力と権威を実感させ、意図的に近づき難い雰囲気を作り出していたと考えられる。

しかし、1559年夏以降は、新しい共通の「祈祷書 (The Book of Common Prayer⁴)」と英語訳聖書を用いて、英語による礼拝の実施が徹底される。Gooden (2009) は、エリザベス朝の宗教政策によって復活した英語の「祈祷書」を「イングランドの歴史において、最も影響力の大きい書物」とし、それは「黙読のみならず朗読されることが想定されていて、多くの人々の意識に浸透した」と説明する (Gooden, 田口 (訳) 2009:139-140)。英語のことは遣いやリズムの多くが、繰り返され、反復されることが始まったのである。ラテン語の聖歌など音楽は残ったが、イコン、典礼用品、ろうそく、その他荘厳な装飾品はほとんど姿を消し、祭壇の代わりに聖餐式用のテーブルが設置された (Usher 2014:207)。これらの変化についてCraig (2014) は、ラテン語で聖餐を説く神秘的な「独身の告解者」が、「英語で俗世界にいる既婚で髭を生やした牧師」に置き換えられたと表現し、その変化がいかに大きく、一部の教区民にとっては不快だったということを想像させる。

The transformation of the office from that of celibate confessor presiding over the mysteries of the sacrament in Latin to that of married, bearded minister of the Word in English was one of the most striking transformations of the sixteenth century (229).

一方で、教区教会がプロテスタントのイングランドが形成される上で極めて重要な機会を果たしたとも述べ、Collinsonによると、神の御言葉を聞いて理解し、母語で聖書を読むという「繰り返し」がプロテスタンティズムの精神の「浸透」を生み出したとも説明する。

it would be foolish to deny to either the Homilies or the Book of Common Prayer the capacity to distil and drop into the mind, almost by an osmotic process, familiar forms of words which may have done more than anything else to form a Protestant consciousness (Collinson cited in Craig 2014:231).

すなわち、救いは、神との個人的な契約により確約されるという信仰義認について、イングランドの人々が母語で認知していったのである。イングランド教区教会につながる人々の言葉、思考、現実が、このような宗教政策を通して、英語によって、作られていったと解釈できる。

礼拝スタイルの変化に対する人々の反応は、順応であった。移行が比較的スムーズに進んだのは、当時のイングランドには宗教改革に熱心な人は少なかった (Williams 2013:465) と説明されることがあるが、それはエリザベス朝の人々の大半が、カトリックかプロテスタントのどちらかを選ぶかまだ迷っていたからだとも考えられる。1558年までに、チューダー王朝エドワード6世がプロテスタント、メアリーがカトリックという大きな変化を既に経験していたので、ほとんどの人はむしろエリザベス女王の政策に適応し、順応することを選んだのである。ウィリアム・シェイクスピアの父親、ジョン・シェイクスピアの例は、そのようなケースをよく表している (Morris 2013)。政府が教区教会に対して、絵画やステンドグラスなどカトリックの象徴的な物品を破壊するか、白く塗るよう命じた際、ジョン・シェイクスピアはメルローズ教会のステンドグラスをガラスに変え

て、壁を真っ白く塗り替えて政府に対する従順を表現した (The Wall Paintings; Stained Glass)。一方、同じように順応を選ぶが後になって、自身の教会のステンドグラスをシンプルなガラスに取り替えたのちに喪失感を覚えたことについて回顧録を書いたため、エリザベス朝においては不従順なものとされ社会的には弾かれてしまった人もいる (Parker 2010)。その他、大陸のカトリック教会の宣教者たちと繋がっていたカトリック信者だけでなく、プロテスタント信者達の中にも、大陸と繋がりの強いグループは「ピューリタン」と呼ばれ、エリザベスの教会に対して反対する勢力として存在した。しかし、エリザベス女王の宗教政策は、英語聖書に合わせて克蘭マーの『説教集』やエラスムスの『福音書註解』(およびその後他のもの)などの公認聖典を英語で使用したり、カトリックの聖職者やカトリック信者に配慮した和解・適合 (settlement) を目指し、ほとんどの場合には、少なくとも表面的にはプロテスタンティズムを受け入れることとなったようである。

エリザベス朝の宗教政策は、教会に聖書の御言葉を取り戻したとも言える。中央とのつながりの中で存在する教区教会を、中央から監視する体制も同時に定められた為この変革は確実に浸透していく。エセックス州ウィンター教区の牧師ウィリアム・ハリソンは、具体的に、英語で書かれた詩篇を30日ごとに、新約聖書を年に4回、旧約聖書を年に1回通読することを推奨し、結果として「会衆全員が生ける神に熱心に、切実に祈りを捧げるようになった」と説明している⁵ (Harrison cited in Craig 2024:230)。共通の英語書物を人々は日々繰り返し、英語の御言葉を通して標準化された文字と発音の習得が反復の効果によってイングランド28の教区において徐々に浸透していった可能性は高い。

宗教生活の変化に対して人々の反応は順応であったが、その人々の多くが、やがて経済的な変化を通して、貧困者として登録をされるほどの苦しさを抱えることになる。そのような大きな経済格差の原因は、イングランドにおける耕作地の減少 (Williams 2013)、すなわち農業経済の変化である。具体的には、「囲い込み」という慣行によりそれまで伝統的に牧畜と農業との混合農業を営む「共有地」として指定されていた土地を区切って (生け垣や溝で囲って)、羊や牛の飼育に利用できる私有地に変えるという決断を、教区の土地を持っている地主達が行った結果、農地と仕事のどちらかもしくは両方とも同時に失った人々が多く輩出されたのである (Hoyle 2014)。もちろん、地主がそれを決断した理由は、羊の飼育を通して羊毛を資材にもち、大陸の富裕層に対する羊毛貿易に参画した方が儲かるからであった。すなわち、これまで自分たちの生活を守ってくれていた上の人達に、全てを取られて生活必需品も買えなくなるほどの最貧層の部類に入る人々が、やむなく労働力として自分の教区を離れて都市に出ていったのである。このように、近代英語期において、人々がロンドンなどの大都市で互いに出会い、方言と方言とが「言語接触」 (Bybee 2019) をした社会背景は非常に暗く、とてもシリアスな状況であった。英語を話す目的は一つ、労働力として受け入れられること。仕事を見つけられなかった場合には、別の場所へさらに移動をしていくしかなかった。そもそも、身体的に弱く働くことができない理由ある場合を除き、エリザベス朝においては、仕事をせずに存在をしていることは怠け者とされ、社会の秩序を乱すものとして処罰される対象になったほどである。仕事を見つけられた場合でも、その後も「よその扱ひ」をされないよう

にする必要があったと想像する。それは、喜びに満ち溢れた移動というよりも、生きるためであった。

労働者として流出した先、都市における社会活動の内容は、町の規模や繁栄の度合いによって多様であり一般化することはできない。1520年代には人口4,000人から12,000人の地方都市がノーリッジ、ブリストル、ヨーク、ソールズベリー、エクセター、ニューキャッスル、コベントリーなど15都市あった (Williams 2013:19)。首都ロンドンやノーリッジ、ブリストルなどの大都市だけではなく、ストラットフォード・アポン・エイヴォンのように規模が小さい街でも、ロンドンとの交通をつなぐ場所にあるということでMarket Townとして変化をしていった町もある。しかし、どの都市でも共通していたことは、エリザベス朝時代のイングランドで若い人々が労働力として流れ込んできたことについて、受け入れる側は街の秩序を乱す原因と捉え、不自然な人口増加を制限しようとしたということである (McClendon and Ward 2024:435)。つまり、仕事を見つけるため、新しい地区でよそ者であることは不利であった。

近代英語期において起こった英語音変化の理由を、地方から都市に人々が流出してきたという現象を原因の一つとして取り上げられることが多いが、それは「言語変化を引き起こすのは様々な理由があるが、一つは外部的な要因として異なる言語が接触することである」(Bybee 2019:352) という言語変化の原則からである。そもそも標準化は文字(綴り)についてであり、音声(発音)については変化し続けていくが、ロンドンなどの都市において、人々が何を目的に英語を使い、互いにコミュニケーションをすることで何を表現する必要があったのかという、社会言語的な観点から考察すると、この時代都市に流出してきた人々が英語を話した目的は相手に受け入れられるためであり、相手の発音や英語を自ら学び、真似して順応をしていくという必要性を感じながら、結果的に英語の綴りと発音の標準化というプロセスを推し進めていくこととなったと解釈する。

互いに理解し合い、成功する為に言葉を使う際には、社会に順応し適応することが、合理的な選択であった。自分を組織の中に組み込ませて、中央に合わせて生きる順応という選択は、メアリー時代からの信仰生活を隠れて守っていたカトリック信者にとっては既に日々のことであり、プロテスタント信者にとっても、都市部において生活上自然な選択であったのである。英語の発音を相手から学び、都市で使われている発音システムに合わせて方言を出さずに適応していくという選択が、結果的に標準化される文字と発音の動きを広げていくことになったと考える。

英語の中でも、聖書の御言葉の学びも都市での生活においては身を守ることに必要となったようである。自分が犯罪を犯してしまった場合、あるいは何かが原因で犯罪に巻き込まれて犯罪者扱いをされた場合には、聖書の御言葉を暗唱している場合には、中世の聖職者と同じように、その処罰を免れることができた。もちろん、常にというわけではなく、議会在それを目的に聖書を読むことを推奨したわけではないが、裁判官は軽犯罪の場合には然り、絞首刑となる重罪を犯した人に対しても、それを適応したケースも多くあるようである。1550年代には受刑者の9%が絞首刑判決から免れたのに対して、1590年代には39%がこの特権を利用し、絞首刑判決から免れたという記録もある (Kesselring 2014:375)。

英語での礼拝、英語で御言葉を学びキリストを礼拝するプロテスタントをイングランドの国教とするエリザベス朝の宗教政策が徹底された背景には、国際情勢の緊張があった。当時、イングランドの宗教政策を推進するエリザベス女王の命を、その初期から狙っていたのは、隣国（カトリック）フランスである。カトリーヌ・ド・メディシスは、0歳でスコットランド女王となったメアリーを、幼少から預かり、自分の息子（フランソワ2世）の王妃として育て、イングランド北部から圧力をかけたり、摂政として政治を行いつつ、末息子（アランソン公）をエリザベスと結婚させることでイングランドを再び支配下に入れるチャンスを狙っていたと考えられる（図1）。なおそのフランス国内は過激化するカトリックを抑えられずにユグノー戦争が泥沼化している。

その様な中で、イングランドにおけるプロテスタントを維持し、防衛を目的として、教区教会をプロテスタントのネットワークを通じて形成しようとする政府の動きは当然のことであった。礼拝を執り行う司祭以外に、教区教会には、エリザベス女王と枢密院から地域に対する自治政府としての役割を任されている役人が備えられた。みな、宗教政策に従う信仰者であった（そうでなければ出世はできなかった）。ケント州のウィリアム・ランバード、コーンウォール州のリチャード・ケアウ、ペンブルックシャー州のジョージ・オーウェンなどほとんどの州には、熱心に州の出来事を記録・編集する者も置かれた（Williams 2013:19-20）。Youngerは、ケント州のウィリアム・ランバードのことを、ケント州における巡回や自治のあらゆる仕事を担っていた「真に国家的に重要な人物」として評価し、教区教会を通じて中央とプロテスタントネットワークとしてつながり、国家の防衛のために働く意識が形成されていたことを示している（Younger “The Correspondence of William Lambarde and John Leveson” サザーランド・コレクション「ウィリアム・ランバードとジョン・レヴェソンの書簡」）。地方教区でプロテスタントを保護し、維持することを目的とした地方自治のためのすべての職務には、犬がいなくなったので探して欲しいというような日常の相談から、女王の政策を遂行するため、「自分の息子達が反対したとしても、自宅私有地と先祖から受け継いだ建物を自分が死んだ後には貧民救済のために使用して欲しい」という遺言を預かり、その遂行など司る⁶ことなどまで、あらゆることをプロジェクトとして、管理遂行することを意味した。エリザベス女王が英国国教会の最高総督として、強制力を持って方策を推進するためには、エリザベスの側近であるウィリアム・セシルやロバート・セシル、フランシス・ウォルシンガムと共に、このようなプロテスタントのネットワークが非常に重要な役割を果たした。

もちろん、教区教会をプロテスタントの信仰に立つ教会として成立させることが、国家を成立させることとイコールであると考えられたことは、それだけカトリックを恐れていたことも意味する。エリザベス女王の重臣ウィリアム・セシルやフランシス・ウォルシンガムは、“It is better to fear too much, than too little.”と表現しカトリックを脅威とする立場をとる（Tudor Times 2015:38）。その為、プロテスタントの信仰を同じくする人のネットワークを中心に地区を治めることは、当然のことであり、国内のプロテスタントの維持と防衛こそが、教区教会の役割として期待された。つまり、エリザベス女王の教区教会では、宗教生活の管理は、信仰心についてではなく、王への従順すなわち、兵士として働くかどうかという政治的な目的で厳しく監視された。イング

ランドの政治家でエリザベス1世の重臣だったウィリアム・セシルは、墓をデザインする際に、自分は枢密院の中での学識者としてではなく、兵士として女王に仕えたという軍服姿で横になっており証を立てている（St. Martin's Church⁷⁾）。兵士であるという意識は重要であった。その様なネットワークが教区教会を形成していった。人々は中央政府が重要だと考える仕事に対して自分を合わせていく姿勢が大切であり、エリザベス女王の言葉に耳を傾け、そこに順応していくことが、国民としてすべき選択であった。英語での礼拝とともに年月をかけてその方針は浸透し、結果的にカトリックに対するプロテスタント国家のアイデンティティを近代英語が象徴する様になっていったという考え方は、このような社会情勢からできる推測である。

このように英語は、女王エリザベスI世の治世において発達し、近代英語期の特徴のひとつである文字と発音の標準化は、英語訳聖書を国家プロジェクトとして推進する上からの動きとして始まるが、下からの順応として浸透して行った。イングランドの教会である「英国国教会」は政治的にローマカトリックから独立することで始まったという歴史がある。組織である教会を政府が管理することに限界はあっても、キリスト教徒として個人の信仰を分かち合う信仰の家族としての繋がりは、信頼関係で強く結び合う人のネットワークとして存在し、そこにこそ根付いていたようである。16世紀後半のイングランド王室と国民とが一丸となり、プロテスタントに堅く立つキリスト教王国として独立した強い国を建て上げるために。

注

1. Articles of Religion (1563) <http://www9.big.or.jp/~grace/voxxiva/seikoukai.html>
2. The Bishop Bible 表紙イメージ <https://textusreceptusbibles.com/Bishops>
3. St Mary's Church <https://www.stmaryssaffronwalden.org/>
4. https://archive.org/details/bookofcommonpray0000chur_i8j7/page/n5/mode/2up
5. “the ignorant had learnt divers of the Psalms and usual prayers by heart” “such as can read” “so that the whole congregation at one instant pour out their petitions unto the living God”
6. サザーランド・コレクション「ウィリアム・ランバードとジョン・レヴェソンの書簡 1596年2月12日の手紙
<https://www.search.sutherlandcollection.org.uk/details.aspx?ResourceID=1457&ExhibitionPage=3&ExhibitionID=1471&PageIndex=1&Keyword=William%20Lambarde&SortOrder=2>
7. 軍服姿ウィリアムセシルの姿
<https://www.worldhistory.org/image/12354/tomb-of-william-cecil-lord-burghley/>

引用文献

- Bybee, Joan (2019) *Language Change*. 小川芳樹・柴崎礼士郎 (訳) 『言語はどのように変化するのか』 開拓社, 東京.
- Craig, John (2014) “Parish Religion” in S. Doran and V. Jones (eds) *The Elizabethan World*, Chapter thirteen, 221-236, Routledge: London and New York.
- Gooden, Philip (2009) *The Story of English*. 田口孝夫 (訳) 『英語の歴史』, 131-165, 悠書館, 東京.
- Haigh, Christopher (2013) *Elizabeth I*, 2nd ed. Chapter 2, 31-50, Routledge: London and New York.
- Hoyle, R. W. (2014) “Rural Economies Under Stress: A world so altered” in S. Doran and V. Jones (eds) *The Elizabethan World*, Chapter twenty-six, 438-457, Routledge: London and New York.
- Kesselring, Krista J. “Rebellion and Disorder” in S. Doran and V. Jones (eds) *The Elizabethan World*, Chapter twenty-two, 371-387, Routledge: London and New York.
- Knowles, Gerry (1999) *A Cultural History of the English Language* 『文化史的に見た英語史』 (1999) 小野茂・小野恭子 (訳) 開文社出版, 東京.
- Latreille A., and A. Siegfried (1958) *Les Forces Religieuses Et La Vie Politique*. 仙石政夫・波木居齋二 (訳) 『国家と宗教』 岩波書店, 東京.
- Millward, Celia M. (2012) *A Biography of the English Language*, Third Edition.

- Wadsworth, Cengage learning: MA, USA.
- Morris, Sylvia (2013) “Restoring the medieval decorations in Stratford’s Guild Chapel”
<https://theshakespeareblog.com/2013/11/restoring-the-medieval-decorations-in-stratfords-guild-chapel/>
- McClendon, Muriel C. and Joseph P. Ward (2014) “Urban economies” in S. Doran and V. Jones (eds) *The Elizabethan World*, Chapter twenty-five, 426-438, Routledge: London and New York.
- Parker, William (2010). *The history of Long Melford*, 70-74, Hathi Trust.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.32044012016218&view=1up&seq=83>
- Stained Glass. *The Guilt Chapel* <https://www.longmelfordchurch.com/visiting/stained-glass/>
- Usher, Brett (2014) “New Wine into Old Bottles: The doctrine and structure of the Elizabethan church” in S. Doran and V. Jones (eds) *The Elizabethan World*, Chapter twelve, 202-221, Routledge: London and New York.
- Textus Receptus Bibles. (Access 2024. Oct 25) <https://textusreceptusbibles.com/BishopsTheWallPaintings.TheGuiltChapel> <https://www.guiltchapel.co.uk/history/wall-paintings>
- Tudor Times (2015) *Sir William Cecil: Elizabeth I’s Chief Minister*, Tudor Times Ltd.
- Williams, Penry (2013) *The Later Tudors: England 1547-1603* (New Oxford History of England), J. M. Roberts (General Editor), 1-21 and 454-487, Oxford, UK.
- Younger, Neil. “The Correspondence of William Lambarde and John Leveson” *The Southerland Collection*.
<https://www.search.sutherlandcollection.org.uk/Details.aspx?&ResourceID=1457&PageIndex=1&Keyword=Young&DateFrom=0&DateTo=2024&SortOrder=0&ThemeID=0>
(accessed: 1 October 2024).
- 児馬 修・松浪 有（編）（1995）「近代英語」『英語の歴史』, 91-132, 大修館書店, 東京.
- 寺澤 芳雄（著）・川崎 潔（編）（1993）『英語史総合年表－英語史・英語学史・英米文学史・外面史』, 研究社, 東京.
- 西村秀夫（2021）「英語史」『英語学概論』, 325-328, くろしお出版, 東京.
- 廣岡英雄（1956）『歴史的に見た英国民の言語』 169-226, 篠崎書林, 東京
- 八代崇（1986）「中道（ヴィア・メディア）を目指して」『宗教改革著作者集第12巻』 386-419, 教文館, 東京.

